

77. キルギス共和国国立博物館所蔵古代トルコ語タラス碑文の調査研究

帝京大学 文学部史学科 専任講師 齊藤 茂雄

概要

本研究では、キルギス共和国国立博物館に所蔵されている古代トルコ語のタラス碑文の拓本を採ることが最大の目的であった。タラス碑文は、球形の無加工の岩石に刻文されるのが特徴であり、写真撮影では文字の全体像を写すことができないのが難点であるため、拓本を採ることで文字が検証可能な状態で公表することができると考えたためである。

そこでキルギス科学アカデミーのパキット・アマンバエヴァ博士を通じて国立博物館の担当者と現地で折衝を行ったが、採拓の許可は下りなかった。やむを得ず実見と赤外線撮影により、第8銘文、第11銘文、第12銘文の録文作成と読解を行った。タラス碑文の読解により、他地域の古代トルコ語史料との地域的差異や共通点を明確にすることが今後の課題である。

背景および目的

キルギス共和国のタラス河流域から発見され、タラス碑文と通称される古代トルコ語諸碑文は、これまで多くの研究者によって読解が行われてきた。しかし、刻文されたルーン文字原文は読解を行った研究者による複写しか存在せず、他の研究者による検証が可能なものではなかった。当然のことながら、各研究者は自分の読解と整合するように文字を複写しているため、それぞれに齟齬が出ている状態だった。そのうえ都合が悪いことに、碑文は球形の無加工岩石の上に刻文されているため、写真では文章全体を写しきることができず、検証に耐えるものにならないのである。そこで、碑文の拓本を採り、その写真を公開することで検証が行える状態にするのが本研究の目的であった。

方法

本研究の助成が決まった2024年の8月に、既知の研究者であるキルギス科学アカデミーのパキット・アマンバエヴァ博士を通じて、国立博物館の担当者に碑文採拓の希望を伝え正式に折衝を行った。その場で採拓は可能との返答を得たため、2025年8月の調査に向けて準備を進めた。

準備段階では、拓本採取のために墨・タンポ・画仙紙などの消耗品を購入し、念のため写真撮影も行えるように脚立やライトも購入した。それらを持参の上で2025年8月5日から16日にかけて、キルギス共和国に渡航し、調査を行った。

碑文の採拓が本研究の中核をなすものだったが、アマンバエヴァ博士を通じて博物館の担当者と再び折衝した結果、拓本採取はできないという回答があった。説得を試みたが結局回答は変わらず、方針転換を迫られることとなった。そこで、写真撮影を調査の中心とし、同時期にキルギスに滞在していた帝京大学文化財研究所の藤澤明氏の協力を得て、国立博物館に所蔵されているタラス第8銘文、第11銘文、第12銘文に対して、赤外線カメラを使用した写真撮影を行った。前年まで、第10銘文が博物館の屋外に置かれており、採拓を急ぐ必要があると考えていたが、本年より屋内の倉庫に収蔵されたとのことであり、こちらは調査を行えなかった。

結果および考察

今回の調査で拓本を採取することができなかったため、碑文の読解を検証可能とする材料を提供するという、本研究最大の目的を達成することはできなかった。それでも、赤外線カメラによる撮影ならびに実見により、文字の確認を行うことができたため、自分なりの読解研究を行う基盤を作ることができた。とはいえ、撮影した写真は、球形の碑文に少しずつ赤外線当てながら写真を撮ったため、公表しても極めて見にくいものになってしまう懸念は残る。また、キルギス国立博物館と撮影した写真の公開方法について、明確な取り決めを今後交わす必要があるため、赤外線写真も掲載しないでおく。

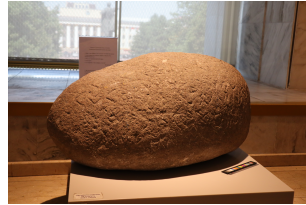


図 1. 第 8 銘文

キルギス国立博物館所蔵タラス碑文（第 8 銘文）



図 2. 第 11 銘文

キルギス国立博物館タラス碑文（第 11 銘文）



図 3. 第 12 銘文

キルギス国立博物館タラス碑文（第 12 銘文）

写真・実見の結果に基づき、碑文の読解を行った。試案として、第 11 銘文、第 12 銘文の翻字・再建形・和訳を提示する。碑文の読解には Джумагулов1963, Жумагулов2017 などを参考とした。

タラス碑文第 11 銘文 (T. 11) [cf. Жумагулов 2017, p. 228-230]

1 行目

kičigkišimaTWLQLDiaTWRSQWGLma

kičig kisim a tul qaldī a tura saq oylīm a

私の若妻よ、ああ！彼女は未亡人として残された、ああ！守護するものは我が息子である、ああ！

2 行目

Q W m R č W R a r T m i š Q W L i a s z ü z ü m a

qumar čor a ār atīm eš qurī a siz özüm a

クマル= Cholよ、ああ！私の成人名はエシュ=クリである、ああ！あなたは私自身のものである、ああ！

3行目

W Y L R W m D a T č a ü k z č a

uyalarum ud atča üküžčä

我が血縁者たちよ、牛馬のごとく、雄牛のごとく（あれ）。

タラス碑文第12 銘文（T.12）[cf. Джумагулов 1963, p. 26]

1行目

Q W T L W G ü z n s ü s i z ü z ü g i

qutluy özin süsüz üzügi

クトゥルグよ、自分自身で戦争なくして壊れたものよ

2行目

Q W T L W G a W G L N i N W L T i Q

qutluy a oylanın ulıñıq

クトゥルグよ、ああ！息子たちとともにお前は哭いた。

以上の検討結果はあくまで試案であり、語注も含めた完成版を、改めて用意する必要がある。

(完)

発表論文

- 1) 齊藤茂雄 2025:「碎葉川のトルコ系遊牧民——西突厥・十姓を中心に——」山内和也／齊藤茂雄（編）『アク・ベシム遺跡を掘る——よみがえるシルクロードの交易都市——』勉誠社, pp. 34-56
- 2) 齊藤茂雄 2025:「中国国家図書館所蔵明抄本『唐会要』「諸蕃馬印条」の検討——唐支配期のトルコ系遊牧民に関する新史料——」『内陸アジア言語の研究』40, pp. 131-149
- 3) 齊藤茂雄 2025:「草原都市碎葉（スィアブ）の性格と遊牧民との関わり——キルギス共和国アク・ベシム遺跡の調査成果と関連して——」『唐代史研究』28, pp. 5-32

引用文献

- 1) Джумагулов, Ч. 1963: *Эпиграфика Киргизии*, Фрунзе.
- 2) Жумагулов, Ч. 2017: *Жазуу эстеликтердин айрым маселелери жана кыргыз терминологиясындагы бүгүнкү процесс*, Бишкек